

学位論文題名

経済学における企業家像の研究

：市場経済における動態的調整と革新の推進者

学位論文内容の要旨

本論文では、企業家像の多様性に関する様々な議論を参照しながら、経済学における企業家像を研究する。

第1章では、本論文で採用する方法について見ていく。具体的には、第一に、企業家像を探求する上でそれを取り巻く経済社会像まで議論を広げていかなければならない理由について考察し、第二になぜ企業家という存在が現在では主流の新古典派経済学の枠組みに入りえないのか、そして企業家性と経済システムとの関係性を見ていく上で、なぜ新古典派市場理論の部分的修正ではなく抜本的見直しが必要なのかについて考察する。その上で、検討していかなければならない議論の論点整理を行う。

第2章と第3章では、企業家性なしには機能しない経済システムとはどのようなものであるのかという視点から、企業家競争という競争的経済秩序のミクロ的分析を行う。

第2章では、市場論を基にして企業家競争という競争的経済秩序の形成とそこでの経済活動について見ていく。第1節においては新古典派市場理論における企業家性の不在を、第2節においては企業家競争という競争的経済秩序像をいくつかの事例を用いて示し、第3節においては企業家競争論の原型としてのオーストリア学派の議論を紹介し、第4節において企業家競争を通じた市場調整過程をカーズナーの議論を基にして見ていく。そして第5節においては企業家競争における不確実性の問題を見ていく。企業家活動は、それまで依拠してきた知識や情報を顕在化させ、それらを新たな活動に適用させる上で不可欠な試行錯誤を促進させる企業家競争という経済秩序の形成を通じて、経済資源の配分調整を行う。

市場における企業家性は、顕在化された知識や情報を多様な形で活用していくことを促し、活性化させるが、それらの知識や情報を貯蔵したり、それらに基づいて新たな知識や情報を開発したりするという特性はない。これは、組織としての企業における企業家性によってもたらされる。第3章では、企業を企業家活動の母体として位置づけ、企業組織と企業家性との関係性について見ていく。第1節において企業の競争的環境として企業家競争の特徴をクリステンセンが提示した事例を用いて見ていき、第2節においては企業家活動の母体という企業像の原型としてペンローズの議論を見ていく。そして、第3節において企業家活動の母体としての企業について見ていく。そこでは、企業が組織として行う知識や情報の開発・貯蔵過程が企業組織の成長の原動力としてだけではなく、新たな企業を創業・起業する上でも不可欠なものであることを野中・竹内やオルドリッチらの議論を基にして論じていく。

企業は内部資源を活用する成長組織であり、創業・起業は成長過程で生じるスピノフである。企業家活動は、企業の成長と創業・起業の双方に関わる活動であり、この活動は、企業家競争という競争的環境をさらに活性化させることになる。第4節においては、第2章の内容とも合わせて、企業家競争という競争的経済秩序像をミクロ的視点から提示していく。

企業家競争という経済秩序は、知識や情報の発見・活用に関する試行錯誤を自ら実行するという企業家性を活性化させる。しかし、これには、企業家性を活性化しその働きを活かしていくように経済システムを構成する様々な制度の調整というもう一つの調整過程が伴っている。企業家性が活性化される経済環境は企業家性それ自体によって形成される。第4章と第5章では、この過程を企業家競争のマクロ的動態として位置づけ、その特徴を見ていく。

第4章では、シュンペーター、ヴェブレン、ガルブレイスらの資本主義論を取り上げ、彼らに共通する経済活動の技術への依存度の増大とそれに伴う企業家活動の無用化論をそれぞれの視点から見ていく。さらに、第1節ではシュンペーターが提示した景気循環を企業家的な調整秩序として位置づけ、その特徴を論じていく。第2節では、規格・標準化をもたらす機械過程と所有権の拡大という営利原則とのハイブリッド・システムとして資本主義をとらえ、そこでの中心的な主体であった所有者兼経営者による企業家活動が、次第に機械過程のみに取って代われ、所有と経営の分離

がもたらされるという過程をヴェブレンの議論から見ていく。そして第 3 節では、資本主義が次第に技術依存度を高めていく中で、企業においてテクノストラクチャが形成され、経済システムそれに適合して変化していくというガルブレイスの議論を見ていく。

これらの議論は、企業家性が技術と組み合わせられることによって企業組織や経済システムが変化していくという過程を説明するものであるが、そこには大きな欠点がある。それは、企業組織の変化に伴う企業家性の在り方の変化や経済システムの変化に伴う企業家性の在り方の変化については論じられていないということである。企業家競争のマクロ的動態は企業家性・企業組織・経済システムという三つの要素の関係性の動態であり、我々はこの動態を論じる枠組みが必要となる。特に必要なのが企業家性の在り方の変化という問題である。第 5 章ではコールの企業家的変化論を足がかりにして、この問題に取り組んでいく。

企業家活動が企業家活動たる所以は、それが企業家競争という経済秩序を形成し、そこでの競争を活性化させることで、企業家性と企業組織と経済システムとの関係性を変化させながら経済資源の調整とイノベーションを促進させるところにある。企業家活動とはこのような意味での企業家性を帯びた経済活動の総称であり、その担い手は、程度差こそあれ、何らかの利益を獲得することになる。一方、経済システムも企業家性を誰かに担ってもらふことなしには機能していかないように進化してしまうため、企業家性の担い手の存在はますます重要となっていく。経済学における企業家像を研究するにあたって最初に直面する「企業家とは何か」という問題は、企業家競争という経済秩序の下での企業家性の在り方を探求することを意味する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 西 部 忠
副 査 教 授 佐々木 憲 介
副 査 准教授 橋 本 努

学 位 論 文 題 名

経済学における企業家像の研究

：市場経済における動的調整と革新の推進者

[概要]

本論文（A4版全107頁、目次、序章、第1章～第5章、終章、参考文献、脚注を含む）は、シュンペーターのイノベーション論や資本主義論、オーストリア学派の市場過程論、ペンローズの企業成長論、ヴェブレンやガルブレイスらの資本主義論、さらにコールによる企業家史、また野中・竹内やクリステンセンなどの企業組織論など、企業家に関連する多様な議論を参照・検討しながら、経済学における統一的な企業家像を明確化しようとする試みである。企業家とは、競争的経済秩序において経済資源の活用を促進し、経済システムの調整や革新をも推進する特性である企業家性 (entrepreneurship) の担い手ないし乗り物であるとされている。まず、本論文の要旨を述べ、次に、本論文に関する評価と審査結果を報告する。

[本論文の要旨]

第1章は、論文全体の問題設定と方法を論じている。「企業家とは何か」という問題に関する従来の議論は多様な企業家像を提示するが、それは、企業家のあり方が経済環境の差異に大きく依存しているからである。企業家の統一的定義を得るには、企業家活動・精神といった主体的要因だけでなく、客体的な経済環境・制度の変化を検討しなければならない。企業家性の所在やその在り方の変化は、企業家競争を通して形成される競争的経済秩序のミクロ的動態分析（第2, 3章）と、企業家競争に伴う企業家性と経済システムとの関係性を扱う企業家競争のマクロ的動態分析（第4, 5章）の双方から検討される。

第2章は、企業家競争を通じた経済秩序の形成とそこでの市場過程について論じる。経済人や完全競争を仮定する新古典派理論では「企業家性」がモデルから排除されている。これに対し、カーズナーの市場調整過程論では、未利用な利益機会の機敏な発見とその後の企業家的参入が競争的状況を顕在化するとともに、市場秩序を動的に形成する。企業家は、このような企業家競争の下で経済資源の新たな有用性を顕在化させる、情報や知識の発見・開発活動の担い手として位置づけられる。

第3章は、企業を企業家活動の母体として位置づけ、企業組織と企業家性との関係性を論じる。クリステンセンが提示したように、企業家競争は企業にとっての環境であり、ペンローズが言うように、企業は企業家活動の母体である。また、野中・竹内やオールドリッチらの議論によれば、企業が組織として行う知識や情報の開発・貯蔵過程は、企業組織の成長だけでなく創業・起業の原動力になっている。知識や情報の意義は、企業家競争によって形成される経済秩序の下で初めて顕在化されるが、その源泉は企業組織による知識の貯蔵・開発にある。

以上の議論により、市場は企業家競争を通して経済秩序を生み出す場であるが、企業はその母体として存在することがわかる。市場と企業が企業家競争の下でそれぞれ企業家性と補完的な関係を築きつつ、経済資源の調整を行っていく。これが、ミクロ的視点から見た競争的経済秩序像である。さらに、企業家競争秩序の下では、企業家性の活性化が経済制度の調整を帰結することもある。この経済制度の調整には企業家性の在り方の変化も含む。これらは、企業家競争のマクロ的動態として位置づけられる。

第4章では、シュンペーター、ヴェブレン、ガルブレイスらの資本主義論を取り上げ、経済活動の技術依存度の増大とそれに伴う企業家機能の退化という、彼らに共通する議論を検討している。シュンペーターの景気循環は企業家的調整秩序と位置づけられるが、資本主義の独占化に伴い企業がイノベーションを組織的に遂行するにつれて、個人企業家の重要性が低下していく。ヴェブレンによれば、資本主義とは規格・標準化をもたらす機械過程と所有権拡大という営利原則との混合であり、所有者兼経営者による企業家活動が次第に機械過程のみに代替されると、所有と経営の分離が進む。また、ガルブレイスは、資本主義が次第に技術依存度を高めていく中で、企業内部にテクノストラクチャが組織され、経済システムがそのような企業組織に合わせて変化していく中で企業家の役割も変化すると論じた。これらの議論は、19世紀末以降の独占・寡占化という経済体制の変化を背景としており、個人企業家が担ってきたイノベーションが大企業の経営管理に取って代わられる傾向を描いたものである。吉田氏は、企業家機能が退化するのではなく、むしろ、企業家活動の母体が個人から企業組織へと移行したと捉え、そこから企業家性そのものが企業組織や経済システムの変化に伴い変化していくと考えている。

第5章ではA.H. コールの企業家的変化論を基にこの問題を検討している。コールは、企業組織の創始・維持・拡大を請負う個人あるいはグループを企業家として位置づけ、それを中心とした経済社会のネットワークを「企業家的構造」と呼ぶ。企業家活動は、企業組織を変化させるだけでなく、彼のいわゆる「企業家的流れ」という過程において、経済諸制度をも変化させる。企業家的構造が達成承認欲という企業家の動機に誘因を与え、さらに企業家的構造の成長に伴い、企業だけではなく経済システム全体においてもイノベーションが生じていく。これは、企業家性と企業組織、企業家性と経済システム、そして企業家性を内部にもつ経済システムの経済社会における在り方、という三つの視点から企業家競争のマクロ動態像を論じたものと解釈される。企業家競争のマクロ的動態は企業家性・企業組織・経済システムという三つの要素の動的関係性であり、この中に企業家性の在り方の変化という視点も含まれる。

終章では、以上の議論より、企業家性は市場にも企業組織にも必要な要素であり、市場論、企業論、資本主義論という三面から立体的に論じた本論文のアプローチの正当性を確認している。

[本論文の評価と審査結果]

本論文は、経済学から経営学に至るまで、幅広い文献を渉猟しつつも、「企業家とは何か」という問題に対して、(経営学ではなく)経済学の視点から首尾一貫して接近し、企業家競争を通じて自発的に形成される経済秩序の中に企業家性の在り方(担い手と担い方)を探求するという方法を提示している。この点に本論文の積極的な意義と独自性が認められる。吉田氏は、企業家について経済学的に考察するため、企業家の人物像ではなく、企業家が経済システムにおいて担っている役割を明らかにし、そのような役割を企業家に託す経済システムを解明することを課題としている。それを果たすべく、企業家性を、企業家個人の活動や精神に還元されるものではなく、むしろミクロとマクロの両面で動的な市場経済社会が要請するシステム的特性と考え、第2章と第3章において企業家と経済システムとの関係性を、第4章と第5章においてその関係性の変化を論じている。

企業家的競争秩序のマクロ的動態は、企業家競争の下での経済秩序に企業組織や経済社会が適合すべく変化していく過程と、その変化に伴って企業家性を担う上での能力や企業組織に対して提供する企業家的サービスがイノベーションに特化していくなど、経済システムに対する企業家性の在り方が変化していく過程の双方を含んでいる。これは、企業家性と経済社会が共進化する過程を示しているものとして興味深い。第2章と第3章におけるミクロ的動態と第4章と第5章のマクロ的動態を両立させるような市場経済モデルはいかなるものかは論じていない。これはさらに考究すべき論点として残されている。

本論文は、企業家性・企業組織・経済システムという三つの要素の関係性としてミクロ的・マクロ的動態が生じることを進化的視点に立って明確に論じている点で全体として成功している。これは企業家研究に対する経済学独自の貢献であり、ヘバートとリンクが明確に示すことのなかった動的な世界像を示すものとしても高く評価できる。よって、本論文は本経済学研究科の博士(経済学)の学位を授与するに値する、と審査委員会は全会一致で判定した。